ウータン

"HUTAN" 森の通信

No. 10　1989・9・26

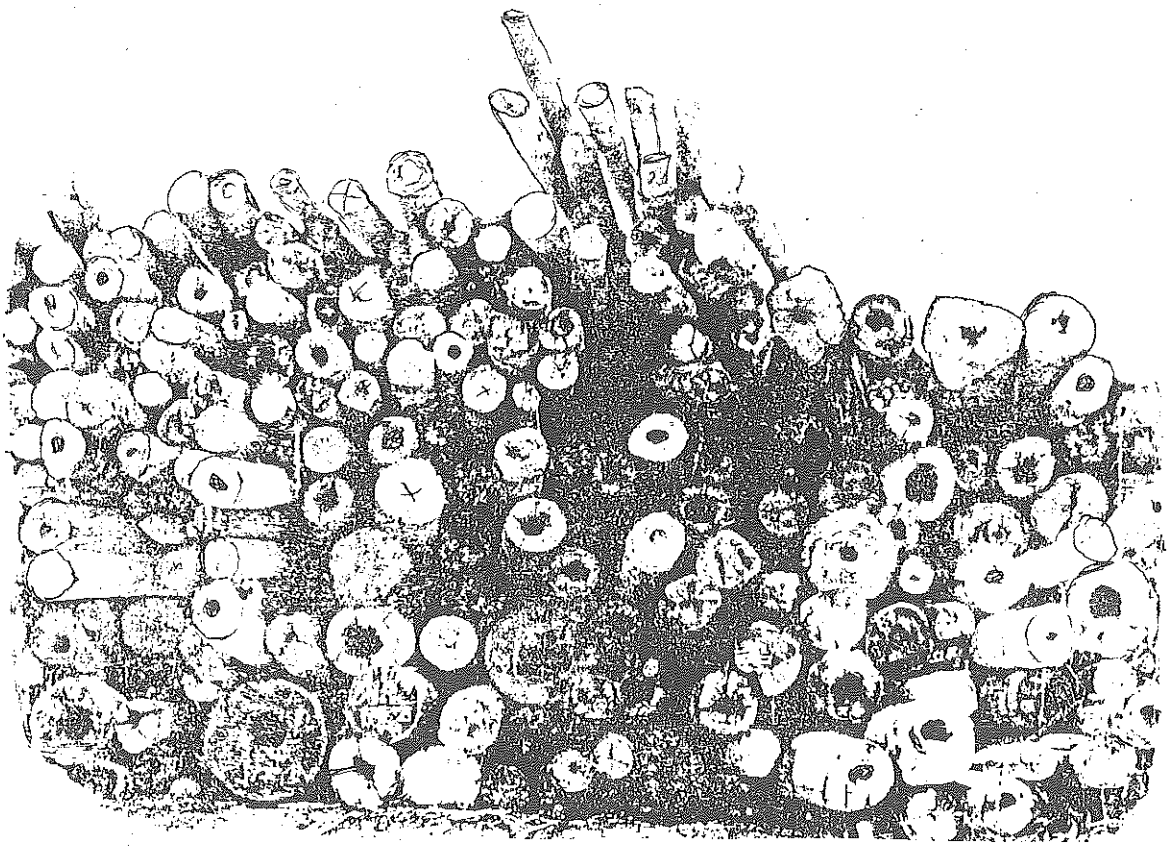
発行／ウータン・森と生活を考える会　郵便振替　大阪3－3880

大阪市北区中崎西1-6-36　サクラビル新館308

『自然を返せ！関西市民連合』事務所気付　☎06・372・1561

1部　¥100

年会費　¥1000



切られた大木も虫食いや中空の木は打ち捨てられる
（ボルネオ・ラジャン川沿いの製材所にて）

タイの森は消えた
次はミャンマーか…？

生島美成子

世界の国々から、民主化を求める声があがっている。ミャンマー（旧名ビルマ）で一九八八年八月八日に、軍政への叛乱が頂点に達して、ゼネストに突入したのは一年前のこと。今では、日本も現在の軍政を認めて国交を正常化しているし、人々もジャングルの中の学生のことを過去のこととしようとしている。彼らは、依然としてマラリアと闘っているにもかかわらず――。

ここでは、特に東南アジアの「最後の楽園」といわれるミャンマーの森について述べようと思う。

タイの熱帯林は、もう再生不可能な状態にまで伐採されている。一九八八年十一月に南部タイを襲った洪水のことは、本紙『ウータン』No8 はたやすのりさんが書かれているので、ご存知の方もあると思う。

森林伐採が原因であることは、タイ政府もよく承知していた。そこで、全国的に森林伐採を「禁止」。いままで、伐採で甘い汁を吸い続けてきたタイ軍関係者・商人達は、孤立政策を取ってきたラオスやミャンマーに近づき始めた。

新しい木材の利権で収益をあげようという欲望のために、世界の熱帯雨林地帯で起こっている問題――政治と人権問題がここでもおこっている。

ソウ・マウンは現在の政権を維持するのに不可欠である軍需品を入手するための外貨確保の手段として、タイの木材バイヤーをつかもうと必至である。軍事政権の支配下のミャンマー領の熱帯雨林地帯にも深刻な状態は、着々と進んでいる。

一九八四年の米国『ナショナル・グラフィック・マガジン』は、ここの熱帯林の破壊が年間二五万エーカーの広さで進んでいると報告している。ミャンマー国営の木材会社は、年間五四万トンの木材を伐採し、政府がコントロールしている地域の市場に出やすいチーク材は、十年後に枯渇すると言われている。

北部では、ミャンマー政府はヘロイン王と呼ばれているクンサーを含む地方の有力者と結び、木材を運搬するための道路を作った。貿易商社は、通常麻薬と木材の売買にもかかわっていると言われている。

南部では、ある少数民族反乱軍の指導者たちは、タイの商社のために森林の伐採に協力しているが、少数民族の反乱軍はビルマの森林伐採、木材運搬計画を攻

撃している。ビルマ軍は、タイ国境地帯に木材の運搬道路を通そうとして、カレン族領を攻撃し、激しい戦闘が展開されている。

このチーク戦争は、そこにずっと住んでいる少数民族の家である森林の深刻な荒廃を引き起こし、軍部エリートたちの手軽な金儲けのために、森林を切り倒しているのだ。このままでは、ミャンマーの雄大な森は、ごく近いうちに過去のものとなってしまうかもしれない。

資料＊ABSDF全ビルマ学生民主戦線・機関紙「夜明け」
一九八九年四月　より

詳細はビルマ青年緊急救援会
京都市南区東九条南岩本　ニ-一-二〇七
NCCY気付

1989年(平成元年)8月31日

4版　(ロ)

鉛筆もノートも泥土に消えた

〈寄稿〉吉岡みね子さん
タイの子らが洪水の詩集
命と自然に思い

幅十一㌢、縦十八・五㌢、わずか二十頁の一冊の詩集がタイから送られてきた。昨年バンコクで開かれた第十回世界詩人会議で面識をえた詩人ソムチャイ・ソムキットさんからだった。

彼は南タイ、ナコーンシータマラート県の中学校で教鞭（きょうべん）をとる。まだ二編を収録したこの詩集のタイ詩人の一人であるこの詩集は、彼の作品ではない。彼の生徒たちの詩二十三編をまとめたものである。

昨年十一月二十四日、南タイを襲った大洪水の惨状を、生徒たちが見たまま、感じたままにつづった「小さな叫び」である。

折しも私はバンコクにいた。連日、新聞は大きな見出しで毎日、洪水の惨状を報じていた。

林面積は一九七三年の四三％から一九八六年には一九％と減少した。

ちなみにタイ全土に占める森林面積は一九七三年の四三％から一九八六年には一九％と減少した。

タイ全土に伐採禁止令を公布した。

真で水害の悲惨さを伝えた。

「死の色」・「この世界が今私の眼前に迫きついて離れない。」

水害の原因は木材の乱伐にあった。かねてから指摘されていた自然破壊の危機に、タイ政府はやっと立ち上がった。そして一

洪水に飢えるたろう
（中略）
東北タイは金を失った
／南タイもまた金を失った
／眼をもてあましている
／ことを
五十頭の象たちが仕事も
なく／力失せ／若鳥の助けよう／力失せ／若鳥の助けをひたすらじっと待っている
（中略）
どうか忘れないでおくれ
／巡回映画車が／今なおエンジンをかけたままだって
森は木偶（でく）の／死亡はし
／がみつく木の根っ子もなく
／家々を一緒に呑みこんだ
まもなくしたら／誰もが
どこへ向かおうというのか——
これから先／いったい
た

人作りと力作りに精を出す。モノを作って生命を失う。力を得て自然を失う。人は何のために生き、何のために死ぬのか。そし

詩集のとい合わせは
〈八川西市大和東二-三八-五　河原さん〉TEL
(0727-94-0115)

《寄稿》

サラワクから日本にむけて〜一九八九・九月

ひでしま ゆかり

（はじめに）

七月二八日から八月一日迄、日弁連（日本弁護士連合会の略称）の調査に加わって、マレーシア・サラワク州の奥地Ｕｍａ　Ｂａｗａｎというカヤン族（サラワクの先住民のうち農耕部族の一一九八〇年当時の人口統計によれば、カヤンは一万三三六八人、イバン族、ビダユ族に次いで先住民の三番目の人口である。ちなみに、マレーシア国民は国民総背番号制であり、国民はアイデンティテイカードを持っている。）の部落に入った。サラワク州の首都マルデイから船で一日がかりの所であり、現地にいたのは正味三日間に過ぎなかったが、人間の「生活」とは一体何かということを考えるきっかけになった。

国内の公害問題も解決せぬ段階で、海外へ行って何が出来るんだーという声が弁護士会内部でも強い。しかし、日本と世界ーとりわけ東南アジアとの関係がこれほど密接になって来ている中で、ことは単に国内の問題だけを取り上げていれば事足りるというものではないし、（第二次大戦で体験した被害者と加害者との二面性を再び経験しているようだ）、日本政府ですら（たとえ欺瞞であっても）「環境」をテーマに取り上げざるを得なくなっているこの時期を逃せば、またと機会はない、という気もする。そして、何よりも、私自身の私的な関心領域として、先住民たちが伐採や日本についてどのように感じているかを知りたい、という意識が強かった。

（川をさかのぼっていけば
ー自然は想像以上に奥深い）

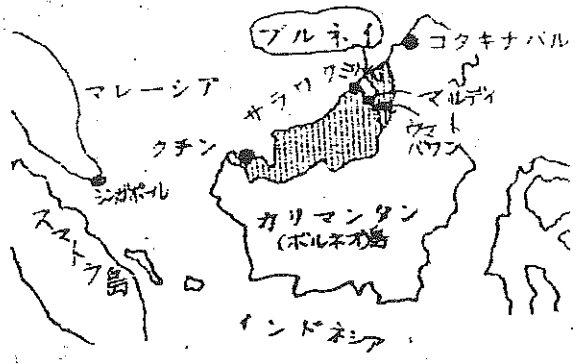
マルデイを出発してからロング・ラマを経て、目的のウマ・バワンに着くまでに五時間以上かかった。川を船でさかのぼって行くと、両岸には小さな集落が見え隠れし、子供達が岸辺で遊ぶ姿が見られる。くねくねと曲がりくねり、泥で濁った川からは、何とも言えぬあまい薫りが漂って来る。あれはくだものの薫りだよーとＳＡＭ（マレーシア地球の友）のトーマスが言う。えっ！ー排気ガスで汚れた空気には慣れっこになっているが、こんなに甘い風を、自然は運んで来てくれる。一体何種類の木々

からこの森林が成り立っているのだろうか、と目を凝らして見ようとするが、地面が平坦なため、奥が見えない。

船は、お客が降りる場所をわきまえて、集落や、時にははしけのそばで停止しては進んで行く。所々、岸辺に貯木場があって、伐採され地面が剥き出しになった茶色の丘のうえに、太い木材が並べてあるのが見える。すぐ脇には伐採労働者のロングハウスが建てられ、ドラム缶が並んでいるのは、雨水を生活用水にしているためか。さながら、鉱山労働者の生活空間を彷彿とさせる。この緑と川に包まれた中で繰り広げられる人々そして生活は一体どうなっているのだろう。

（ウマバワンに着いて
―コミュニティの表情）

既に夕方が近付いたころ、ウマバワンに着いた。船着き場から丘の上へと上って行くと、細いコンクリート（人が通るだけの幅だー後に、ウマバワンには自動車が一台もない。）の小道が続き、その向こうからーほら、顔、顔、ー子供達が珍客の訪れを敏感に察して顔を覗かせてはついて来る。その表情ったら！この村には大きなロングハウスが二つ（二列というイメージだ）あって、一階の



入り口では女性たちが作業をし、周囲で子供達が戯れている姿が見える。

今夜の宿泊先は日本の「公民館」だろうか、コミュニティの集会所の二階だった。建物の一階は集会室となっており、前に黒板があるほか、部落の人口（世帯数で数えているのは、子供の数の変動を考慮してのことだろうか）、地図、さらには伐採に賛成派と反対派の世帯数に至るまで、部族についての情報が壁に貼ってある。後で、部落には世襲で決まった伐採賛成派の村長（州政府の任命手続きが必要だが、多くの部族では、世襲で決まるという）の外に、反対派の中で形成した議会とその議長がおり、議長が集会所の二階に家族と共に住んでいることがわかった。議長はジョクという三八才の男性で、一時は村の外に出ていたが、伐採問題が生じてから村に戻り、一九八七年に行われた部落のブロッケード（道路封鎖）を組織したという。

私達が集会所につくと、いつの間にか部落中（と思えるほど）の子供達が集会所の周りを取り囲むようにしてこちらの様子を窺っていた。子沢山は、昔の日本の農村と同じだ。そこで始まったのが、H弁護士の折り紙教室。新しいものに接するときの子供達の眼差しは、いずれも真剣だ。折り紙教室がひとしきり終わると、夕べの水浴びの時間だ。女性たちが子供を連れ、洗濯物をもって川岸に集まって来る。ここでは川がひとつの重要な生活空間として（井戸端も兼ねて）機能していることがわかる。彼女達はろうけつ染めの布一枚を体に纏ったまま、川に入って行く。泥の色をした水がどれほど汚れているのか、あるいは奇麗なのかわからぬまま、私達も「水浴び」と洗濯をしてしまった。

その夜、村中の人々が集まって歓迎し、話をしてくれる中で、私達は伐採による川の水の汚れについて認識することとなった。伐採に伴う上流の土砂崩れによって、川の汚れが進み、飲料水として使えなくなることはもちろん、魚も小さくなり、前より少なくなったという。それにしても、集会所には大人子供含めて村中の人が集まり、中には入りきれずに窓の外から私達の様子を見ている顔もあった。（それは二日目の晩まで続いた。）小さな子供までが母親に抱かれながら私達のやりとりを見つめている姿に、忘れていたコミュニティ的人間関係を考える。

《伝統的焼畑について》

マレーシアの定住化政策により、先住民たちは従来カストマリーライト（慣習法）として認められて来た土地を限定され、バンドリー（日本の『入会地』のようなものだ）を定められて、その範囲で彼らの生活を営むようにされている。カヤンや他の農耕部族の場合、焼畑による陸稲作りが主要な生活源であるが、彼らは一年ごとに農地を移動させ、一五年位で一循するシステムを採っている。二年以上同じ農地で耕作すると、栄養不足で収穫が減るのだという。一五年程で一巡する間に、最初の農地にはいわゆる第二次林と呼ばれる森林が育っているというから、熱帯雨林の気候に適した農作方法なのだろう。焼畑のやり方は、雨期が過ぎて、しばらく土地を乾燥させた後、その年の農地となるべき区域の草本を人力でカット、焼畑により農地として整備する。しかし、毎年耕作地が変わるため、まず造作り、農作業のための仮小屋作りから作業が始まるから、想像するだけでかなりの重労働だ。部落の過疎化の一原因に焼畑の労働のきつさがあげられていたが、納得してしまう。集会に集まってくれた人々も顔触れも、確かに若い男性が少ないことに気付く。

現在ジョクを中心に、新たな農業

な。

「先住民の焼き畑こそ、森林破壊の元凶である」とは、政府の言い分であるが、火付けの場面を見れば、一見尤もらしく聞こえるのだなと思う。しかし、焼畑は周辺の森林を破壊せず、一五年程の周期で二次林の再生を図っていることから見ても、自然とかなり調和的だ。これに対し、伐採は全てを破壊する。自然との調和など一切考えていない代物だ。植林すれば と言っても、その植林の実質は一種類の木ーフィリピンで行われているユーカリの植林の様にーを形式的に「植える」だけだから、逆に生態系の破壊を進めるだけだという。今まで数百種類、否それ以上もの種類の木々から構成され、ちっぽけな人間には計り知れない調和を保って来た森林なのだから。そのうえで、道路、橋など伐採に伴う被害は計り知れない。

その後、私達はランドクルーザーで伐採現場を見に行くということとなった。ようやく調達したランドクルーザーならぬ軽トラックの荷台に乗って、奥地へ出発。道は、ブルドーザーが伐採のためにつけたガタゴトの埃だらけの道だ。途中、伐採現場で働く別の部族のロングハウスがあった。「今日は日曜日で伐採は休みだよ」の声に、仕方がない！諦めて引き返すこととなった。付近には、ブルドーザーで作った（というより薙ぎ倒した、という感じの）キャタピラの跡がくっきり付いた道があり、そこは黄土色の地表が露出して無残だった。

《貯木場の丸太たち》

三日目、伐採現場が見られないとあって、せめて対岸の貯木場を見に行くことにした。

若い労働者が二人歩いて来たひとりはマニキュアを奇麗に塗ったキュートな二〇才という（もっと若く見えたがなあ）男の子。ブロッケードに参加したこともあると言う。日本ではあまり考えられないことだが、他に職がないため加害企業で働かざるを得ないのだ。彼らは、木に付けられた印の意味や、木材の価格すらよく知らなかった。彼らはただ、一定以上の直径のものを一律に伐採して行くだけなのだ。商品価値のないものは、伐採現場から運ばれたうえで、選抜されていく。これでは皆伐の状態になるのは無理からぬことだ。

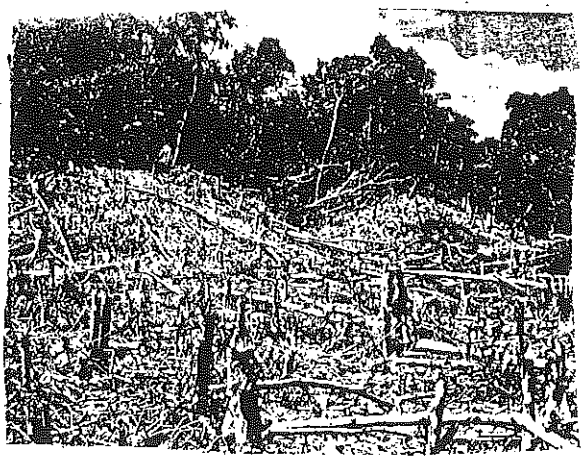
ほぼ一五分間隔で、ひっきりなしにトラックが木を運んで来る。私達に「見ろ！」と言わんばっかりに、ブルドーザー風の車がお尻を上げながら勢い良く木を蟹のはさみ様のものでくわえては、トラックから降ろして並べていく。一歩間違えば車自体が転倒しかねない勢いだ。近くで見る木材は凄い太さと迫力だ。これが倒れた日にはイチコロだろう。そういえば、SAMが出している伐採

の在り方について議論し、例えば焼畑を部族全体で行うなど工夫を始めているという。

《火付けシーンに思ったこと
ー焼き畑と伐採との関係》

翌朝、焼畑の火付けを見るため、カヤンの人々の木船で対岸にわたった。そこから焼き畑の現場までは約一時間でフラットな道だと言われていたが、どっこい！途中小川の中をズブズブとズックのまま入るはめになったり、やれやれだ。子供も含め、現地の人の身軽なこと！彼らにしてみれば、ぬかるみに丸太を添えたり、今年新たに部族が歩き易く作った道なのだと思うと、何も言う気がしなかった。

農地へ着いたのはちょうどお昼頃で、カヤンの人々も火付けの前に休んでいる時間だった。彼らは焼畑の期間中、準備が忙しいときは仮小屋で寝泊りする。火付けの直前は余り



睡眠時間がとれないという。毎年新たに作るという小屋も、木や木の葉をうまく使っており、涼しくて居心地が良かった。私達に、火付けのやり方を見せようとしてか、ひとりの老人と見える男性が、石油を入れた竹筒ー長さ二メートル以上あると思われるーを、私達の目の前に示した。逞しい！

食事が終わり一段落した頃、いよいよ火付けが始まった。女性たちも、先の竹筒を槍のように手で持って「農地」に向かい次々に走って行く。初めての体験に、緊張と興奮の一瞬。あっ、火が出たーと思う間もなく、あちこちから火の手が上がる。乾燥させた草木が勢い良く燃えるのが見える。農地と仮小屋との間には小川が流れ、延焼を防ぐと共に、そこから生活用水を取るようになっているのも生活の知恵だろう。火が付き始めると、周りの気温が一気に上がるのが分かる。火が広がるにつれ上昇気流が強まり、気がつくと上空で入道雲が出来上がっていた。四〇世帯分の土地四〇〇エーカーほどが一度に焼かれて行く様は、凄いの一言。そういえば、人工衛星からも焼畑はキャッチされるのだっけ。この火力によって、作物に「有害」な虫たちを駆除し、木や草を燃やした栄養分で、一年分の陸稲の肥料にするのだろう

状況についての小冊子には、労働災害の問題が、写真付きで取り上げられていた。日本の炭鉱事故を思わせる凄惨な写真は、無理な開発の行方を示すようだった。ブルドーザーは何の歯止めもなく、ひたすら目的の森林を目掛けて道を作って行く。部族の先祖の墓も、部族が育てて来た果物の木も、業者には全く目に入らないのだ。

その晩、岸辺に星を見に行った。たくさんの流れ星。岸辺にはほたるの光が、星と呼応して輝いていた。と、異種の光が目に入る―二四時間体制で作業をしているトラックの光だった。昼間、身近に聞いたブルドーザーの音が、対岸から鳴り響いて来た。

《人々は何を求めているか？》

この伐採に対し、あちこちの部族でブロッケードを行ったことは日本でも報道されている。しかし、このような実力行使が、住民の補償要求から始まったことを、私は知らなかった。ウマバワンにおいても、一九八七年のブロッケードの際四二名もの逮捕者がでた。しかし、全員が起訴猶予で釈放されたという。これだけ見ても、警察や私兵に守られた無理な伐採の行方が予測出来るというものだ。

しかし、人々は本当に何を求めているのだろうか。住民たちは『強い子の「ミロ」』とクラッカーを朝食にしていた。こうした商品は、恐らくかなり奥地まで浸透していると思われる。そして、幾つかの家庭にはテレビがあった。多くは都会へ行った息子等の土産だが。これらの商品が、今後どれ程入り込んで行くのか。そして、生活がどこまでそれを望んでいるのか。テレビひとつ取っても、睡眠が遅くなるなど生活スタイルが変わる―とある女性は語った。ある母親は、私達の伝統的生活を破壊する伐採を止めて欲しい。物質はいらない―ときっぱり述べた。

彼らが今後どのような生活を選ぶにせよ、彼ら自身の自己決定の問題であって、私達がとやかく評価する余地はない。同時に、彼らの自己決定の範囲を制限する権利も私達は持ち合わせていない。日本の中の運動を、殺されて行くサラワク森林及び人々の行方と結び付けながら改めて問い返すと共に、彼らの言葉（女性たちが即興で自分達の思いを歌ったとき、歌とはなにかを実感する想いだった）や『生』そのものの在り方を、私達の現在の『生』とつなげてみたい。

Ｙｏｕ　ｍｕｓｔ　ｃｏｍｅ　ａｇａｉｎ．―そう、また来るから…。

☆マレーシア・サラワク続報

この9月10日から5日間、数百人のプナン族やサラワクの先住民たちは、バラム川、リンバン川流域で「森林伐採抗議」のバリケードを12ヶ所にわたって行った。男や女、子ども達も参加。

「森は奪いとられた！食糧供給もたたれた！野生生活もなくされ、狩猟生活も出来ない」と…。（9月14日付）

現在、道路封鎖が行われたバラム川上流では、インドネシア国境付近まで伐採道路が出来、一日三交替、24時間体制で伐採が続けられている。

住民と森にとって苛酷な状況にもかかわらず、日商岩井は伐採計画に2千万ドルの新規投資、トーメンは製材工場建設に1億ドルの新規投資を決定。

続いて、9月18日付のSAMの手紙には、63名のプナン族の人々が逮捕された。だが、バラム川奥地の数ヶ所では依然として、「怒りの道路封鎖」が続けられている。（抜訳・編集部）

18th September 1989

UPDATE ON THE PENAN ARREST

Todate 63 Penans have been arrested. [illegible] are from 12 villages in the Layan, [illegible] of the Baram River.

SAMより

表2　割りばし 輸入品別国別表

1989年 1～5月　（千円）

品名・国名 COMMODITY & COUNTRY	単位 UNIT	当月 CURRENT MONTH 数量 QUANTITY	当月 CURRENT MONTH 価額 VALUE	累計 CUMULATIVE YEAR TO DATE 数量 QUANTITY	累計 CUMULATIVE YEAR TO DATE 価額 VALUE
4419.00-010 割ばし Waribashi					
韓国	TH	84550	100562	367375	422273
	KG	280520		1246117	
中国	TH	934506	501989	2695206	1431061
	KG	4131121		12210378	
台湾	TH	2885	10646	9163	26956
	KG	32645		83639	
香港	TH	4500	7200	9390	14571
	KG	37500	-	72120	
タイ	TH	4825	1970	47735	18185
	KG	19375		192939	
マレーシア	TH	-	-	3990	1835
	KG	-		11090	
フィリピン	TH	37927	18976	181697	81784
	KG	120543		543213	
インドネシア	TH	279852	160671	1236283	647376
	KG	1139729		5021139	
カナダ	TH	13398	11636	67307	64314
	KG	63058		332580	
アメリカ	TH	-	-	9965	7345
	KG	-		69967	
チリ	TH	8360	6375	73140	52143
	KG	32102		280855	
南アフリカ	TH	23125	8544	168765	60261
	KG	101750		732127	
合計	TH	1393928	828569	4870016	2828354
	KG	5958343		20796164	

（参考）表1　木材及び製品、木炭の輸入量

合計　549,569,990

中国　51%（カバ、マツ）
インドネシア　23%（マツ、〃）
韓国　15%
フィリピン　3%（ラワン等）
カナダ　2%（ポプラ）
チリ　2%
南アフリカ　2%
など……

わりばし問題を考える

鈴木 千里

「お父さん、学生さんが割りばしのこと、話してほしいって電話かかってきてんねんけど、ちょっと出て。」気さくなおばさんの声。その後、電話に出て下さったお店のご主人も、心よくいろいろと話をして下さった。八月五日は、割りばしについての勉強会準備に自分なりに調べてみようと、割りばしを扱っている問屋さんに電話をかけてみたのだが、少し、割りばしの見方、考え方、変わったような気がするのですが----。

まず第一、割りばしといっても、材質や、細工の仕方によって種類がいくつかあるし、呼び名も違ってくる。船型の利休ばし、まん中の割れ目に溝を入れた、元禄ばし、頭の所を傾めにけずった、天級げばし。そして「下級」になると、ただ単に切れ目を入れただけのもの。(もち帰り弁当などによくついている。要するに、弁当を食べる間、折れさえしなければいいというもの。)

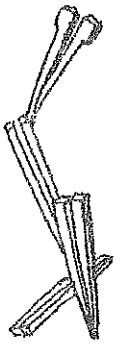
材質については、日本の代表生産地・岡山の松、北海道の白樺材を利用したものが有名。また、大阪の近くでは吉野杉を利用したものがよく出廻っているし、その他には、松や竹を使ったものもある。ここで一つ注意しておきたいのは、もともと割りばしは、廃材(木材をとったいらない部分)を利用して作られていたという事を忘れてはいけない。

では、いつ頃から、日本産だけではまかなえない程、需要が伸びだして、ついに一九八八年に国内生産量が約九〇億本、それに対して輸入品が一〇四億本(一年間の使用量は約二百億本、一人当り約一五〇膳)という数字が出てしまうほどになったのか。

輸入品が増えた理由としては、外食産業や持ち帰り弁当の急速な普及。国内産は原木価格、人件費高騰で、コスト面では輸入品にはかなわないということだ。主な輸入先は、中国(椿の木)、インドネシア(松)、フィリピンで、この三国で約90%(表一、二)。また割りばしはほとんどが製品輸入である。

また、食堂などで、割りばしが使われる理由として、見た目に衛生的だということがあげられている。本当のところは-----?

ごく程の問屋のおっちゃんの話にも、ちらっと出て来たのだが、割りばしがよく使われだしたのは一九六〇年(昭和30年代)---。この頃より、保健所等の指導がきびしくなり始めたという。



紙すきにチャレンジ

横見 幸子

去る九月三日、国際交流センターの団体協議会室に十数名ほどが集まり、紙すき実演会を行いました。

私たちは、使い捨て社会の中で自分らの生活のぜいたくさを見失いがちです。私たちの生活の一部であれ、諸外国の人々の多大な苦しみ、貧しさの上に成り立っています。

牛乳パックはたいへん上質なパルプで作られており、森林破壊の原因の一端です。私たちの身の周りから紙すきを通して、私たちの生活を見つめ直したいものです。紙すきをする過程で、アイロン、ミキサーをばんばんかけたり問題はまだありますが、もったいない という気持ち大切にしたいですね。

今回、で一応、修業して来た二人（

奥村さんと私）がリードしたものの、初心者同様でかえってみんなが知恵を出し合うことができてよかったです。

紙すき専門の人や外国の人もかけつけて下さって、より充実した紙すきになったと思います。一度皆さんもチャレンジしてみて下さい。

（前頁の図を参考にして下さい）

①パックは切り開き、底をとって四つ切りにします。そしてビニールをはがしやすくするために、それを熱いめの湯に二日間浸し続けておいて、パックのビニールをはがします。

②パルプを小さく切ってミキサーに約二分かけ、バットに溜めていきます。水一ℓに対し乾燥状態のパルプ五gの割合です。

③バットに六ℓ分を溜めて、いよいよすきます。しっかり枠を持ち、たてに向うから手前にすいて水を切ります。この時、決してちゅうちょしてはいけません。おもいきりよく二回すけば、平面は平らになりなす。ネタの厚さは0.7㎜が目安です。

＊一回すいた後で好きな形、色の和紙やドライフラワー・もみじなどを乗せたりすると自分のオリジナル作品が出来て楽しいです。

バットには、ハガキ一枚をすく度に、水一ℓ・紙三〇gの割合を保っておきます。ミキサーにかけたネタをざるにこして、それをだんご状にたくさん作っておくと、次々に紙をすくことが出来ます。

④四角いネタをのせたまま金網を、タオルの上におき、上からネル布をのせて、さらに簀をのせて、その上から押し板でほどほどにおさえて水気をとります。ネタを金網からはがしてネル布と交互に重ねます。（一度に三〇枚まで）

⑤このように重ねたものを上下板ではさみ、ブロック（重いものなら何でもかまいません）で約三〇分圧縮した後、ローラーでネタを板に貼り、（乾燥と整形のため）かげ干しします。

なま乾きの時、板からはずしてアイロンで完全乾燥して、できあがり！

＊すき枠は、大阪市で紙すきの家（大阪市生野区巽北一　五　四）や天王寺のベルタで手に入ります。

牛乳パックは、紙すきの家に送ると再生・利用されます。

熱帯林伐採から何が見える・・・？

西岡 良夫

食べ物があふれて余り、衣服のスタイルが毎年変わる。電機製品や自動車が大量に生産されて、多くの物が店頭に並べられる豊かなニッポン。何て素敵な国だろう。あちこちに「使い捨て」の紙がうず高く積まれる。

余りある「繁栄」が溢れ、日々変わるニュースに埋まる社会。おかずや米の「残り」があろうとも、人々はほとんどこの状態を振り向きもしません。僕たちは以前をふり返ろうともしないのです。だから、苦痛も無く、楽しい毎日が送れるのです。「地球が危ない」「熱帯林がピンチや」という情報もいつか立ち消えになるかもしれません。

だが、アマゾンやボルネオ島などでは大量の森林破壊が起こされ、日本企業のアジア進出によって「公害」が輸出され、そこに住む人々は生活ばかりか、文化も伝統も全て壊されようとしているのです。

フィリピンやマレーシアの禿山を見て帰って、日本の森は二次林にしろ三次林にしろ「残されてるなぁ」と感嘆するのは僕だけでないと思う。それは資金力も「国際的地位」もある金満国日本、熱帯材の世界一輸入国のニッポンだから、自分たちの住む地の森はあまり切られていないのです。

「熱帯材の輸入には、深くて暗い過去がある。誰でも知ってることだけど、失くして泣いた事はない。どうでもええ、どうでもええ、振り返らないだろう♪・・・♪」と、船で熱帯材が運ばれてくるのを見て、『黒の船唄』が出来たのだと、誰かがジョークを言った。それは当らずとも遠からずだろう。

戦後、焼け跡だらけだった日本に、どうして「繁栄」がもたらされたのだろうか。類希な経済成長はなぜ出来たのだろうか・・・。

一九五〇年、日比通商協定が結ばれて、フィリピン材輸入の基礎が出来たのです。そこへ六月から始まった米国が起こした朝鮮戦争で、日本は基地として使われます。五一年に米軍GHQは「日本に補助軍事物資を生産させる」決定をし、米軍特需は日本経済の「復興」から「発展」への原動力となったのです。戦争景気で木材需要は未曾有

の活況を呈したのです。

木材業界で作った『南洋材史』によると、「戦争による特需は極めてタイングが良かった。一九五一年に立ち直り、五三年から南洋材輸入が飛躍的に増加する。日本の発展は重化学工業を推し進めることで、そのために機械、設備の輸入による技術革新が必要で、それらを輸入するのに木材等での外貨獲得と合板材輸出が必要となった。外貨獲得のための輸出は、加工貿易制度として定着する。東南アジア市場は日本経済にとって、重要な輸出市場ともなった」と、述べられています。

「樹の宝庫」ミンダナオ島を中心に、多くの伐採が急速に行われたのです。二十世紀初めに国土の七割を占めていたフィリピンの森。日本の伐採で一九五七年に四七%もあった森は、六八年には三一%になりました。それからも破壊が進み、現在では至る所が禿山となって二〇%もないのです。

戦前も戦後も、各国への戦争によって、木材業が盛んになり、日本経済の立て直しがなされたのです。そして重化学工業を中心に産業構造を確立して、アジアへ資源確保のために開発投資を積極的に進めました。全く他者を踏みつけ抑圧し、その地を破壊して「繁栄」がいま成り立っています。

その間政府は、一九六九年に日本銀行の海外投資拡大を認め、七一年に海外投資損失準備金制度を設け、七二年には対外直接投資自由化を実施。大企業のアジアへの開発、税制優遇措置を作ったのです。折からの「石油ショック」で、企業はアジアへ莫大な投資を行ったのです。これが今日の経済侵略と「公害」輸出の始まりの原因。多くの「公害」輸出や熱帯林破壊によって、また多くの生命が奪われている。

ボルネオ島の先住民やアマゾン「インディオ」などは、先祖からの慣習を守り、必要に応じて狩猟、漁労を行ってきました。所有権も無く、焼畑で採ったものも分配し、お互いに助けあいをする暮らしだったのです。焼畑も地力が回復されるまで休ませる。「低レベル」の技術と少しの伐採——僕たちの社会の感覚とは全く違う方法で、彼等は森に抱かれて、生きてきたのです。それすらも企業などは破壊しようとしています。

今政府は「地球環境保全のため熱帯林の保護」とかいっているが、環境庁に問いただすと「熱帯林の再生はわからない」と断言。その上ボルネオ島サラワクへ日商岩井、トーメンが行う新規の投資計画を止めさせようともしない。今も侵略が生きつづけています。

この九月九日、アマゾンのカヤポ族テレナさんは、「森が無くなれば我々は、滅びねばならない。道、ダムができれば、移住しなければならない」と言った。僕たちは、彼等の苦痛を感じとっているのでしょうか——？

乱伐に侵される

1989 9.9 毎日新聞

熱帯雨林が森を焼く

熱帯雨林現地ルポ

熱帯雨林とは

年間の平均気温が25度C以上、降雨量が二〇〇〇㎜を超える熱帯に発達した森林。樹冠が主で、樹高は五〇㍍から七〇㍍にも達する。南米アマゾンと中央アフリカのコンゴ川流域、赤道アジアが三大分布域。年に〇・六㌫ずつ減り続けている。年間に消失する三〇〇万㌶のうちアマゾン開発が進む南アメリカで五六〇万㌶、貧困と人口増の圧力がかかる熱帯アフリカが三七〇万㌶、熱帯アジアが二〇〇万㌶の減少となっている。熱帯雨林から抗がん剤、避妊薬、麻酔剤、染料、殺虫剤、カフェインを含むコーヒーなどが最近相次ぎ発見されている。豚（ラタン）製品の年間取引は十五億㌦、カーダモン、シナモンなどスパイスの取引も十億㌦を超える。

体重八〇㌔を超す男が二人、同時に抱き合っても川面に浮かぶその巨大な丸太はビクリとも動かない。幹の直径が根元で一・七㍍、四〇㍍はどの先端でも優に一㍍はあろう。

インドネシアのカリマンタン島を流れる大河マカハムが、河口に近いサマリンダの町にさしかかるあたり、またそういうみごとな熱帯雨林の三番コーナーが（フタバガキ科の巨木の群生）が数キロの巨大な原木場を一面に埋め尽くしている。樹齢二百年に迫る、日本でいえば天然記念物級久スギのような大木である。そのボリュームに圧倒され、われわれは赤道直下に広がる樹海が、あたかもこのような巨大に成熟したラワン樹におおわれているかのように思いがちである。

だが熱帯雨林に一歩踏み込めば、スギやヒノキの人工造林、あるいはブナやマツの純林に慣れた私たち日本人の北方的な森林観が、ここではことごとく通用しないことを思い知らされるのである。

びっしりと絡み込んだ林々につたがまとわりつき、木もれ日すら差し込まぬ深い森であるが、二つとして同じ樹種の木が見当たらない。ここでは一㌶（百×百㍍）に百八十種のさまざまな樹種がひしめきあっているのだ。そしてひとまわり豊々とそびえる"森の貴族"ラワン樹ともなれば、一㌶をそっくりまわって四、五本もあるだろうか。

「アオモリトドマツやヒバだけの山を見て育った僕なんかには想像もつかない森です」。マレーシア・サバ州森林研究所で指導する青年海外協力隊員、青森県出身の千葉道雄さんは目を丸くする。木肌の色、葉脈、葉の形がブナを思わせるフタバガキ科の木を見つけても、めぼしいものはあらかた伐採されていて、あのサマリンダの貯木場にあるような巨大なラワンにはまずお目にかかれない。

例えばマカハム川の赤褐色の濁流を数百㌔さかのぼり、島を二分する上カプアス山脈に近く、地形の険しい山あいへ入りこまなければ、そのようなラワンの巨木はもはや残されていない。それをめざして自然改変などおかまいなし、乱暴な作りの林道が奥地へ、奥地へと伸びていく。

15面へ続く

熱帯雨林を支える地上圏の民衆は、どこでも貧困と人口の過剰、不公平な土地所有制に苦しめられている。生きんがために、土地なき貧民は熱帯雨林へ向かい、森を焼き払って畑に仕立てる。ブラジルのアマゾン川流域にとりつけられたアマゾン縦断道路沿いで、インドネシアのカリマンタン島やスマトラ島でも政府の手によって、ともに熱帯雨林地帯へ大規模な移住政策が進められている。

他方では、"荒波の民"が商業伐採のためにとりつけられた林道伝いに森へ入り、火を放って農作物をつくる光景が珍しくない。表土のやせた焼き畑の多くは政府が肥料、土地改良の面倒をみない限り一、二年で地力を奪われて見捨てられ、あとは草木一本生えない禿地か、野火を逃れてオオチガヤが茂る不毛地になっていく。幽霊光景といわれるものだ。

こうして熱帯雨林が失われていく背景には、先進工業国と途上国との経済格差問題＝南北問題が横たわっている。

えりすぐった頭脳、開発の専門家が参加した国際諮問会議「熱帯林と開発に関する世界委員会」は、一「我々共有の未来」と題する報告で「開発途上国の経済は天然資源の輸出に大きく依存しており、国内的にも国際的にも貧困と資源を収奪せざるを得ない巨大な圧力にさらされている」と警告している。熱帯雨林材を輸入している北の国々が、経済協力と開発援助（ODA）などによって途上国の開発、国民の暮らしの向上に協力し、このゆがんだ南北の構造を改めない限り、熱帯雨林消滅の危機は深まる一方であろう。

途上国の例でも、貧民を再生産している大地主による土地の占有、不正と情実がまかりとおることの少なくない政治、行政の腐敗などが消えゆく熱帯雨林の背景にひそんでいる。問題解決の鍵のひとつは、近隣諸国の経済協力にあるようだ。

ミラー・ムナン氏（マレーシア・サバ州政府森林局長）

熱帯雨林の経済的な価値を保とうとするならば、木材の搬出・アウトプットとつり合った植林・森林へのインプットがなされなくてはなりません（政府が伐採許可を出し、森林を荒らさない搬出ルールを厳守に守らせる。自然破壊にならない林道づくり、植林など＝筆者注）。裏切りなインプットを与えれば、サバ州の森林資源といえども無限ではありえないことになるでしょう。資源経済の問題からして、インプットの水準はアウトプットから導かれる問題に属しています。

"貿易バランス"是正が急務

林の非経済的な価値、生態系と地の保存が大切なことはよ

上を支払なうのに足りない、ということです。それは第一に日本とマレーシアの経済格差のせいです。日本はすぐれた技術を日本国内で、安い原木から高価な加工品をつくり利益をあげています。このような貿易取引の構造を変えない、原料は変わらないでしょう。

地球温暖化の防止に、私たち熱帯雨

カンパありがとう！

市崎英二・林祐三子・安達昌代
伊東万千子・荒川純太郎・大西裕子
太田充栄・康由美・畑健次郎
島谷健一郎・伊藤初美・児玉かずみ
浜地律地・くらしを考える会
島本海豊子・中院彰子・原俊子

八九年度会費納入していただいた方

谷口栄一・太田伊久雄・飛鳥井佳子
佐野・岡本・三木・市崎英二・棚田
小川輝樹・井下祥子・林祐三子
安達昌代・伊東万千子・久保博興
荒川純太郎・橋本啓子・大西裕子
日本環境報・太田充栄・梅尾文子
本田次男・深尾葉子・康由美
山内小夜子・山西睦子・竜子正彦
畑健次郎・奥村巧・伊藤初美
児玉かずみ・浜地律知・島本海豊子
村井さとみ・中院彰子・原俊子・原
西岡良夫・牛島美成子・馬場卓也

（一九八九年九月二十一日現在
（順不同・敬称略）

ありがとうございました。

（会計・牛島）

本を読んでネ！

サラワクの先住民

著／イブリン・ホン

ご存知の通り、世界有数の熱帯林、マレーシア・サラワクの森が危機に瀕している。その森に住む先住民の理にかなった焼畑農業、狩猟、くらしや文化、伝統も根底から破壊されてきてる。「それは乱伐と開発なのだ」と、著者のイブリン・ホンは克明に描いている。

所有権もなく、必要に応じて食を得る――すばらしい社会が、日本などの「侵略・開発先進国」によって壊されてきたのだ。サラワクの森の破壊は、その地に住む人々ばかりか、我々の苦悩にも通じるものではなかったか。

果てしなき伐採と「公害輸出」国、ニッポン。本書は我々の未来へも警鐘を鳴らす、胸うたれざるを得ないものだ。（法政大出版局・値二七八一円）

北井・原後両訳者に感謝！

熱帯林の冒険

著／原後雄太

わが会のT君が、著者宅へ訪れた時にこのタイトルがつけられたと、後日聞いてビックリ。全く明るく、軽るくく読める本だ。

ボルネオへ行く途中のフィリピンでの著者の体験「あなたがかんだ、小指がいたい、昨日の夜の――」的な、気軽なタッチが、ボルネオへと引きつける。そして、ボルネオの先住民に比べて、ジャングルでは「日本人」がいかにドジか、と思うのは私だけでないと思う。

しかし、氏が七い一杯サラワクで、頑張って来たことに敬意を表したい。岩波新書のエエカゲンに書いた『地球環境報告』より、「アンタが一番！」と言いたい。（N）

（洋泉社・値一五四五円）

もう一つ、月刊『世界』10月号、「ODA・援助という逆説」も読んで欲しい！

ウータンからのお知らせ

10/8(日) 月例会　午後一時～　森ノ宮中央青年センター（JR森ノ宮駅より5分）

「サラワクの熱帯林の中から…」集い

話し手（大西裕子さん、鈴木千里さん、平野裕一さん）

三人は、この七月から八月にかけて、各々サラワク入行かれました。焼畑を見たり、資源計画省や先住民組織へ。貴重な報告です。スライドなどを交じえて…。（「マレーシアと私」と共催）

10/11(水)（毎月第2水曜日）　午後七時半　自然連合事務所内で

事務局会議～今後の学習会、集会、野外観察会、これからの運動等について。

自由参加。是非おこしください。

★今回の号をもって、88年会費を納入していただいてない方は、発送をうちきらせていただきます。継続希望の方は次回までにご入金いただきますようお願い申しあげます。

編集後記

■NGOの「国際交流」が見直されている。11月のAフォーラムも行われる。T君の離脱で急挽、分科会の進行を受けた。準備会が進む中で、「日ノ丸」「君が代」を行うことが判った。

戦争責任を問わずの集い。驚いてしまった。熱帯材輸入、伐採は戦争から始まったものだ。ODAもラオス、フィリピン等戦争賠償要求を求めたが、日本はこれを拒否し、商品を売りつけ、アジアを日本の市場とすることから起こっている。経済も自然も抗等してきた日本。それは今も続く。

戦争責任、日ノ丸、君が代を問わないNGOの「国際交流」は何を見直したのか。「会場で土下座するのは勝手だ」「もう仕方がない」という多数の意見。「君が代等をやめさせる姿勢もない。もう場はない。だが今もアジア侵略への加担者の一員だ。（西岡）

■ウータンは何を目的として運動を続けていくのか。何のための"森の通信"か。牛乳パックの再利用を考えるべきか、牛乳ビンの復活を呼びかけるべきなのか？　ついつい目先のことで忙しくしがらな活動であるが、遠くにある運動目標・運動方針は何なのか。何が敵なのか。これを見うしなうと、中にいては気づかなくても、外からウータンを見ると、"とんでもないことをしている"と指摘されることになろう。"森の通信"の中ではわからないウータンの現状を見にきていただきたい。顔を見ていろんなことを語ろう。（牛島）